

## NHK アカデミア 第18回<キュレーター 片岡真実>



みなさん、こんばんは。キュレーターの片岡真実です。今は「森美術館」を舞台に、現代アートの展覧会を作って、その世界の楽しさをみなさんにどうやったら伝えられるかと思いながら仕事をしています。また、「国立アートリサーチセンター」の仕事もしていて(2023年 初代センター長に就任)、そこではもっと広くアート全体を一般の皆さんに、それから日本のアートを世界の人たちに伝えていくという試みを始めています。

今日は、キュレーターという仕事、それから現代アートとは何なのかというようなことについて、お話させていただけるということで、大変楽しみにしています。短い時間ですけれども、たくさんの方がカメラの向こうで見てくださっていて、質問もあとでいただけるようなので楽しみにしています。

### <現代アートの成り立ち>

## 現代アートの成り立ち



**マルセル・デュシャン**  
(1887年～1968年)

「現代アートの父」と呼ばれる  
フランスの美術家

今日は「現代アートって何ですか?」というところから、始めてみたいと思います。

「現代アートがいつ始まったのか」というところは諸説あるんですけども、マルセル・デュシャンという人が、「現代アートの父」とされています。100年以上前になりますけれども、1917年に男性用の小便器を倒して「泉」というタイトルをつけて出品しようとして、それが大変大きなスキャンダルになりました。そこが現代アートの起点というふうにされています。当時は、第1次世界大戦による虚無感が社会を包み込んでいる時代で、従来の価値観を転換しようという「ダダ(ダダイズム)」という運動(1910年代にパリで起こった芸術思想。既存の価値観を転換しようとする運動)があり、その潮流の中にもありました。

## 現代アートの成り立ち



**「泉」**(1917年)  
マルセル・デュシャン

少し時間がたって、また戦争なんですけれども、第2次世界大戦中に、ヨーロッパから多くのアーティストが、アーティストだけでなく多くの人がアメリカに移住あるいは亡命しました。それまでは、アートを中心はパリというふうになっていたんですけども、そこからニューヨークにアートの中心が移っていきます。ですから、この1945年、戦争が終わって20世紀後半が始まろうとするときに現代アートの始まり、あるいはその前のモダンアートとの境目を1945年に置いているというのが、最も一般的なのではないかと思っています。



このあと、いろんな人がニューヨークを中心にアメリカに集まって、1960年代に「現代アート、コンテンポラリーアートとは何なのか」という芸術の定義を、多角的に広げるような動きが起こります。中でも「アート」と言うと、見た目の“形”や“色”の問題かなと思うのですが、形や色よりもその背景にある“アイデア”や“コンセプト”が重要という「コンセプチュアルアート」という考え方が広がって、今、私たちが世界中で現代アートと言っているものも、そのコンセプチュアルアートの考え方が底流にあります



それまで現代アートは欧米を中心に、ヨーロッパやアメリカを中心に発展してきたんですけれども、そのあとさらに時間がたって、1990年代以降、1989年が新たな切れ目になりますけれども、このころから多文化主義、それ以外の地域の文化にも注目しようということで、非欧米圏におけるアートも大きく注目されるようになります。そこがまた大きな転換点です。ちょうど1989年、パリで「大地の魔術師展」という展覧会が開催されて、欧米のアーティストも非欧米圏のアーティストも、それから先住民系のアーティストなども、非常に多様な文化圏からアーティストが呼ばれて展示しました。それが新しい時代の転換点の象徴というふうになっています。

この1990年代以降というタイミングは、日本ではバブル経済が崩壊して、その後、長く失われた30年と言われる時代を過ごすこととなりますけれども、日本の周りのアジア地域では経済発展があり、人口も増えて、日本の置かれている立場も新しい時代を迎えているというところにあります。

現代アートの成り立ち

多様性

では、今どうなっているのかということを考えてみると、コロナ禍の間にさまざまな問題が浮上しました。例えば「人種差別問題」がありました。それからコロナ禍前ですけれども、2017年以降「#MeToo運動」などもあって、さまざまな人種やジェンダー、多様性、それからそうした人すべてを包み込むインクルージョン、そうしたことが世界の現代アート界を大きく変えています。もう一つは、地球環境の変化も含めた「サステナビリティ(持続可能性)」ということも世界を包む大きな課題になっていますが、それがすべてアート作品の中に反映されるようになっていきます。さらにはアートがこのコロナ禍を経て、私たちの「ウェルビーイング」、身体的、精神的、そして社会の健康にいかに関与するののかというようなことにも注目されているところです。

<キュレーターとは？>



キュレーターとは?

curare(世話する)  
care  
cure

キュレーターという仕事、これは一体何なのでしょう。よく美術館の展覧会の角に監視をしてくれている人がいるんですけども、そこに座っている人をキュレーターだと思っている方もいるんですけども、キュレーターは実は展覧会場にはいつもいなくて、その裏側で仕事をしています。

もともとはラテン語に語源を持つ“curare(クラーレ)”、「世話する」という意味です。そこから関連して、“care(ケア)”とか、病気を治す“cure(キュア)”というような意味合いもあります。それが転じて、「博物館や美術館で収蔵品の保存や管理をしていく人たち」をキュレーターと呼ぶようになりました。展覧会を企画して、どういうふうな展示の構成にするのか、そして物理的に、その展示をどういう順番でどのような感じで展示していくのかという制作部分までも担う。そうした仕事をしています。



キュレーターとは？

ビエンナーレ/トリエンナーレ

数年ごとの芸術祭 世界各地で開かれる

1990年代以降というタイミングは、文化が世界中に広がって、多様な文化に注目が集まるようになった時期です。この時期に世界各地で「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」といった言葉を聞いたことがあるかもしれませんが、「国際芸術祭」と言われるものが創設されて、世界中から、いろんな時代のいろんなアーティストが見えるようになってきました。

そうするとキュレーターとしては膨大な情報を収集して、それを編集し選んで、それぞれに独自の意味を与え価値をつけていく。そういうプロセスが、現代アートのグローバル化とともに定着してきました。ですから、「現代アートのキュレーター」という役割が注目されるようになっていきます。つまり、アーティストの数が膨大に増えてしまったので、誰かが選んで編集しないと、どう見たらいいのか分からない。そういう時代を迎えています。

現代アートは生きているアーティストと仕事をすることが多いので、例えばテーマにあわせて新作も依頼しながら、そして展覧会をどんな感じで構成するのかということも、アーティストと話し合いながら決めていくので、そのコミュニケーションも膨大な数になります。それからグループ展、テーマ展というようなことで、複数のアーティストを同時に見せていく場合には、どんなふうに空間にそれらを配置するのか、そしてその並んでいる作品がコンセプトとして意味としてどうつながっていくのか、もちろん美的にも物語としてつながっている必要があるので、その辺りの調整を細かいところまでいろいろとやっています。

ビエンナーレ、トリエンナーレなどの国際芸術祭のような場面では、美術館以外の街なかのスペース、あるいは廃屋や美術のために用意されていない場所での展示も少なくないので、そうした場合には、与えられた空間の歴史や意味、そういうものとの関係性もあわせて考えることになります。

先ほど述べたとおり、1990年代以降、西欧中心だった美術の流れが、多文化主義、グローバル化の影響を受けて、世界各地から雨後のたけのこのように、たくさんアーティストが出てきました。その意味で、このキュレーターの仕事も複雑になってきたんですけども、私がキュレーターになったのもちょうどそんなタイミ

ング、1990年代の終わり頃でした。欧米からも、それから非欧米圏からも、いろんな地域のアーティストへの関心が高まって、アジアのアーティストへの関心も高まっていました。ですから、アジアからアーティストを紹介するあるいは発信していくような、新たな需要が生まれた時代だったというふうに言えると思います。



キュレーターのタイプはさまざまというふうに申し上げましたけれども、私がどんなキュレーターを目指しているのかというと、例えば、生きているアーティストの個展となると、「その人が好きなように展示を構成すればいい」という考え方もあるし、「キュレーターとして、もう少しこんなふうに見せてみてはどうでしょう」というようなこともあるし、それから「私は作品を作るので、展示の構成はキュレーターにお任せします」というタイプもいるし、いろんなタイプのアーティストの方々がいます。ですから、それぞれのアーティストの特性をベストな状態でどのようにしたら引き出せるのかということを考えて、そのキュレーターの出具合も役割も、柔軟に考えられるといいなというふうにいつも思っています。

キュレーターとは？

第9回 光州ビエンナーレ共同芸術監督  
(2012年)

第21回 シドニー・ビエンナーレ芸術監督  
(2018年)

国際芸術祭「あいち2022」芸術監督  
(2022年)

ビエンナーレ、これは韓国やシドニー、それから去年は愛知の芸術祭の芸術監督もやりましたけれども、こうなるとキュレーションの役割はかなり大きくなりまして、アーティストを先に選ぶというよりは、まずはコンセプトを立てて、そのコンセプトと対話しながら、個別のアーティストも選んでいくんですけども、コンセプトに全部染まっている必要もないし、コンセプトだけが浮き立つようなことも避けたい、個別の作品もちゃんと輝くように、そのコンセプトのつながりがそこから浮きあがるような、そんな関係を作りたいと思っています。そうした関係を80人とか100人という間でつなげていくので、その編集をしたり、物語をつないだりという作業はなかなか複雑になります。それを多くの人と一緒に、チームで作っていくことになります。

キュレーターとは？

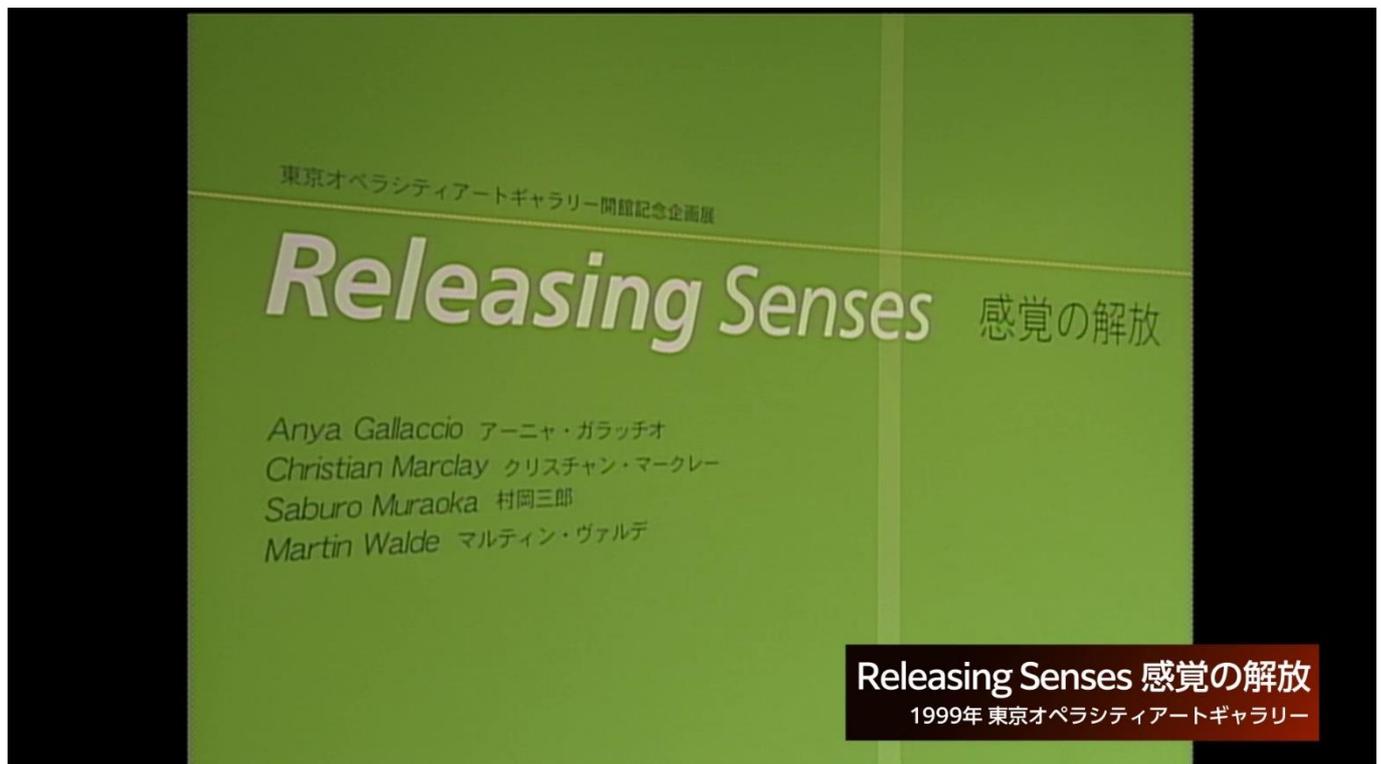
だし  
出汁キュレーター



「どんなキュレーターを目指しているんですか」と聞かれたときに、私がいつも申し上げるのは、「日本のお出汁(だし)のような、“出汁(だし)キュレーター”というのを目指しています」ということです。つまり出汁(だし)は、お料理で目に見えないんですけども、その出汁(だし)がきちんと効いているかどうかで、料理のおいしさ具合が変わってきます。それから、お料理によっては、いりこ出汁(だし)だったり昆布出汁(だし)だったり、出汁(だし)の種類によって全体が決まるということもあるので、その意味でも、目に見えないんだけどもしっかりとそこに出ているものをつないでいる、そんなキュレーターを目指しています。

## <思い出に残るキュレーション>

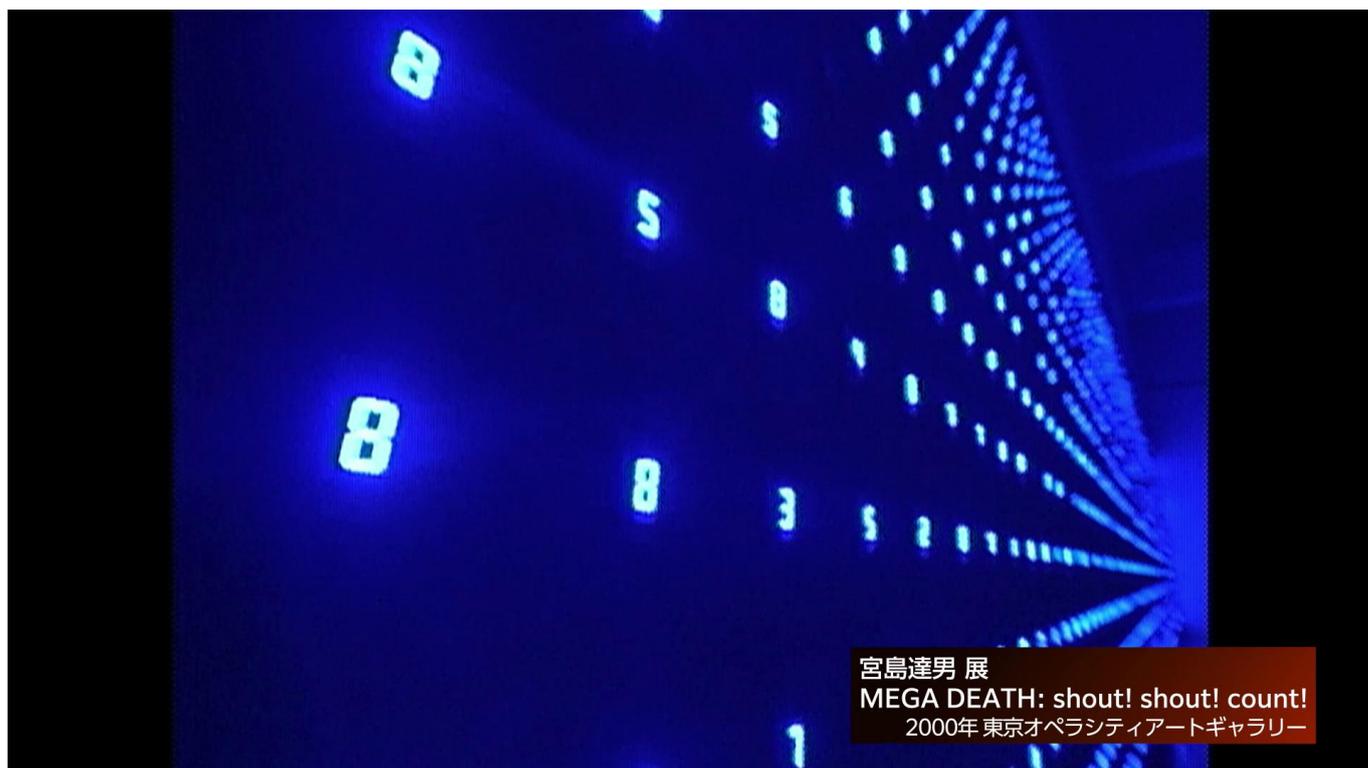
「思い出に残るキュレーションで、どんなものがあるか」というと、毎回、本当に全力投球していて、展覧会がオープンしたときには「なんていい展覧会なんだろう」と思っていて、最近も「年をとっても、ちょっとずつ上手になるな」なんて若者に言ったりしました。初めて自分のアイデアで展覧会を作ったのは、1999年です。西新宿に東京オペラシティという複合文化施設ができて、そこで新しくアートギャラリーができるということで、その開館記念展の「感覚の解放」という展覧会をキュレーションしました。



※映像（開始点 16 分 40 秒）とあわせてご覧ください。

4人の国内外の現代のアーティストに新しい作品を依頼して、観客が触ったり、匂いをかいだり、それから温度を感じたり、“五感”を通して感じる展覧会を作りたいなと思っていました。

マルティン・ヴァルデの作品も、自分が触った瞬間に「なんだこれ!？」とすごく感動したので、「ぜひ出てほしい」と、ウィーンまで会いに行き交渉したりもしました。本当に全て初めてのことを手探りでやってみました。現代アートを、事前の知識がなくても“身体感覚”ということを入りに楽しんでもらいたかったので、チョコレートを使い、ろうそくを使い、CGを使い、いろんな素材を使って体感してもらおうという展覧会を作りました。



※映像（開始点 17 分 54 秒）とあわせてご覧ください。

それから 2000 年には、初めての個展のキュレーションになったんですけども、宮島達男さんの「MEGA DEATH」という展覧会も開催しました。宮島さんは長年、数字の 9 から 1 あるいは 1 から 9 をカウントダウン・カウントアップして、一つの数字を、一人の人間の生命として、「0(ゼロ)」を見せないことで、VOID として、「0」が起こらずに無くならないで、また次の命が生まれるという作品を作っています。この「MEGA DEATH」という作品は、20 世紀の大量虐殺、大量死というようなことを新しいミレニアムが始まる前に思って、どういう時代を人間がつくっていくべきなのかということを考えさせるような展示です。空間の中にセンサーがあって、青く光っている青色 LED、これが一瞬にして全部消えてしまうんですね。そのあと何分か待つんですけども、これがものすごく長くて真っ暗なんです。そこから一つずつ、また命が芽生えてくるといって非常に美しい展示でした。これは今でも宮島さんの代表作だと思いますけれども、すでに国際的にも活躍していて、ロンドンやアメリカの展覧会で個展をしていたんですが、都内の美術館で個展をしていなかったの、ぜひそういう人に大規模な展示をしてもらいたいというふうに思って企画した展示でした。

思い出に残るキュレーション

アイ・ウェイウェイ

アイ・チン

© FAKE Studio

いろいろこれまでに展覧会を作ってきましたが、中でも一番特別なケースは、2009年に森美術館で開催した中国のアイ・ウェイウェイという人の展覧会です。アイ・ウェイウェイは1957年に北京で生まれて、お父様はアイ・チンという近代中国を代表する詩人だったんですけれども、中国が文化大革命に向かう時期、アイ・チンが下放されて、そのお父さんとともにアイ・ウェイウェイは新疆ウイグル自治区で高校までを過ごします。

思い出に残るキュレーション

第48回 ベネチア・ビエンナーレ国際美術展  
1999年

陳箴  
絶唱

※映像（開始点 20分06秒）とあわせてご覧ください。

ちょうど1999年、宮島さんが出たベネチア・ビエンナーレは、中国の現代アーティストが20人近く出展して、まさに、新しくアジアの時代が来るということを世界が認識したタイミングでした。アイ・ウェイウェイ自身

は、1981年に渡米して、ニューヨークで12年ほど過ごして、そのあと帰国します。帰ってからは、現代アートを紹介するような出版もしたり、それからなんと独学で建築も始めて、2008年の北京オリンピックのときに、ヘルツォーク&ド・ムーロンというスイスの建築家が「鳥の巣」というオリンピックスタジアムを設計したんですけれども、そのアドバイザーにもなりました。



彼の多様な立ち位置が大変興味深いなと思って、2007年に北京に行って個展をお願いしました。その2年後の2009年に森美術館で展覧会をすることになりました。ちょうどアイ・ウェイウェイの国際的な関心も高まっていくところだったんですけれども、2008年、その準備中に、四川省で大地震が起こります。四川で起こったその大地震で、構造がぜい弱で“豆腐建築”とも言われた建物の犠牲になって、学校の校舎が倒壊して多くの子どもたちが亡くなりました。その子どもたちの名簿をボランティアとともに、何年生まれで、何歳で、どこの小学校・中学校で・・・というようなことを調べる、そうした活動を始めて、当局からの監視が厳しくなります。それに関連した作品は森美術館での新作として、「蛇の天井」という作品を出してもらいました。子どもたちが学校に持っていくバックパックを蛇のような形をつないだ9メートルぐらいの長い作品を、柱を取り巻くような形で展示しました。それが四川大地震によってできた新作というふうになりました。



そのあとの展覧会が、アメリカそしてカナダで巡回する予定だったんですけども、ちょうど2012年にワシントンでこの新作も含めて巡回する予定だったのが、2011年、アイ・ウェイウェイは香港に渡航する直前に空港で身柄を拘束されて81日間監禁されることになります。そのあとも数年間、自宅軟禁とそれからパスポートを没収されていたので海外に行くことができず、その間、私は森美術館を拠点に北京のアイ・ウェイウェイのスタジオに通って、アメリカとカナダの展覧会の打ち合わせをして、作家は行けなかったんですけども、アシスタントと一緒に各美術館をまわって展示して、写真を撮って送って確認する、そういうプロセスで足かけ3年にわたって5館を巡回させました。個展と一緒にやっているアーティストが投獄されるということはまずない経験だと思うんですけども、その中で展覧会を作るというキュレーターの立場で、できることを全てやったということですね。



※映像（開始点 24 分 23 秒）とあわせてご覧ください。

拘束や自宅軟禁という状況ではありましたが、彼としてもやっぱり表現者なので、そのときに自分が世界に発信したいことを、作品を通してなら止められることはなかったんですね。ですから、アイ・ウェイウェイとしては、自分は北京の自宅にしながら、アメリカやカナダの美術館で多くの人たちに自分の考え方や価値観を、作品が代弁して伝えているということは非常に重要だったと思うんです。

アイ・ウェイウェイという人がいったいどういう人なのか、欧米の美術館の側からの関心も非常にあって、単に政治的な、プロボカティブな、アクティビスト的な側面だけではなくて、アート作品を作っているアーティストであるということをきちんと伝えてあげるためにも、その展覧会が 5 か所も巡回したということは非常に重要なことだったので、“使命感”というか、これはやらねばならないと思っていました。もちろん、世界中のアート関係者が彼のことを応援してくれていたんですけども、その間に実際に作品を通して、アイ・ウェイウェイの思想を世界に伝えるような展覧会が実現していたのは、森美術館をスタート地点にした展覧会だけだったそうで、すごく感謝されました。

アイ・ウェイウェイは、2022 年、世界文化賞を受賞しました。2009 年以来、来日してくれて、ずっと妹分としてかわいがってくれていて、今はベルリンに拠点を移したあとポルトガルに新しいスタジオを建てていて、「できたらぜひおいで」というふうに言ってくれています。個展をやったアーティストとは、結果的に展覧会が終わったあと、家族ぐるみというか、長いつきあいになって、生涯の友になることがとても多いなというふうに思っています。キュレーターとして展覧会を作るという一回の関係性に終わらず、その人をどう理解して、どのように作品を通して多くの人たちに伝えていくのかということをやっている間に、そのアーティストのことをよくよく理解することになるので、そういう意味でも長い友情関係がその後も続くことは、醍醐味(だいごみ)の一つだなというふうに思っています。

## <現代アートを通じて世界を知る>



現代アートは、あらゆる社会、世界を映し出していくので、今日のように戦争があったり、新型コロナがあったり、世界が複雑になっていく、あるいは正解が一つではなくて、なかなか異なる意見がまとまらなくて、それがぶつかり合う、拮抗しあうというような時代を迎えていると、そういうものも作品に投影されていくので、なかなか難しいと思われがちです。正直、現代アートは難しいという言葉で、この仕事を始めてからずっと聞いていました。私は、現代アートはやっぱりそれほど簡単ではない、単純ではないので、生きている世界が複雑であるからこそ、現代アートも複雑で当たり前なんだというふうには思っています。

ただ、その難解そうに見える現代アートを、それぞれのアーティストがどんなことに関心を持って、どういう価値観を持って、なぜその作品を作ったのかということをもひも解いていく。そのプロセスの中で、それぞれのアーティストが生きた時代背景とか、国・地域の歴史、それからどういう社会にこの人が育ったのかとか、経済状況がどうだったのかとか、それぞれの国や地域の文化についても学ぶことになります。

現代アーティストは自身の文化的アイデンティティー、歴史それからジェンダー、人種、さまざまなアイデンティティーに関心を持って、「自分とはいったい何なのか」という根本的な問いを自分自身に向けています。それから、自分を取り巻く社会の構造も、果たしてこれでいいのか。もっとこうあるべきなのではないか。そういう訴えを、作品を通してする人たちもいます。その一方で、世界の、例えば物理的な現象とか、科学の世界とか、国境を越えて人類が真理を求めるような、そういう世界に関心を持つ人も多いです。ですから、それぞれの作品を解釈するために、私自身も中国のこと、アジアのこと、インドのこと、他のさまざまな地域のこと、少しずついろんな分野の扉を開けてのぞいてきました。そのことを繰り返すうちに、私は現代アートを通して、世界のことを学んでいるなというふうに思い始めて、実際にキュレーターとして展覧会に出てくださいと交渉するとき、その人が活動している拠点や生まれた場所、そういう場所に会いに行くのが基本なんです。

なかなかハードコアな体験もしていて、フィンランドのヘルシンキでは、手こぎボートでアーティストが迎えに来てくれて、真っ暗な中、小さな島まで連れて行かれて、そこにスタジオがあったり、カザフスタンからキルギスタンという中央アジアの国、その都市を移動するのに、英語の話せない運転手さんと二人きりで5時間、車の旅をして、途中で国境が来て、「パスポートコントロールを通りなさい」と言われて、あたふたしているうちにその車の番号を写真に撮ったりする余裕もなく、そのままパスポートコントロールに行ったんですね。キルギスタン側に出たら、どの車だか全然分からなくなってしまって、「このままキルギスタンの国境に置き去りにされたらどうなるのかしら」と思って、ちょっと半狂乱になったこともあります。ちょっとした迎えにきてくれて今ここにいますが…そんなことがあったりしました。それから、ブルネイを訪れたときに、リサーチのあとで「今日の午後は、ジャングルにお連れしましょう」と言われて、ボルネオ島のジャングルに行って、マングローブがいっぱい生えているところで野生のサルを見るときか、オーストラリアも中央部分は準砂漠地帯なので、その砂漠地帯に行って先住民のアーティストに会うとか、本当にいろんな場所、地形、気候を訪れてきました。

そんなことをしているうちに、「世界はいかに知らないことがあふれているのか」「世界がどれほど多様なのか」ということも実感しましたし、いろんな考え方、いろんな歴史や文化の中で生きている人が大勢いる中で、「自分という個人の存在はいかに小さいものであるのか」ということも毎回感じています。一方では、どこに行っても“アーティスト”という人はいて、ギャラリーがあったり、美術館があったり、それが一つの世界をつなぐ“共通言語”になっています。現代アートを入り口にするだけで、どの町に突然降り立ってもすぐに友達ができる。これはまた、すばらしいことだなというふうに思っています。



こんなことを考えていると、現代美術館は「世界というものが何なのか」ということを学ぶ“教室”のようだなと思い始めて、現代アートを、学校で習う教科の一つというふうに捉えるのではなくて、あらゆる授業の科目に通底する、もっと総合的なものなのではないかと考えるようになりました。そして、授業の科目を入り口に現代アートを見てみたらどうかなというアイデアから「ワールド・クラスルーム 現代アートの国語・算数・理

科・社会」という展覧会が生まれました。



※映像（開始点 44 分 53 秒）とあわせてご覧ください。

結果的に皆さんが小学校で習う、国語、算数、理科、社会に哲学、音楽、体育、そして総合という科目を加えて8つの入り口を作りました。展覧会のコンセプトを考えて実際に作ってみると、新たに学ぶことが毎回あるんですね。今回も展覧会を作りながら、実際に展示を始めてみると、国語や社会といった各国あるいは地域の多様性が明らかに表れているようなところでは、改めて世界がどのくらい多様なのかということが見えてくるなと思っています。



こちらの作品は、先ほど紹介したアイ・ウェイウェイが漢時代の壺を落としているところなんですけれど、それは伝統を壊して新しい価値観を提示しようとしているようにも読み取れます。ただ、アイ・ウェイウェイ自身は、「連写機能のあるカメラを買ったので、それをテストしただけなんだよ」と言っていましたけれども…。あとは昔の壺に Coca Cola という字を書いてみたりすることで、中国の伝統と西洋の大衆文化がどう融合するのかという試みも見えてきます。



こちらの作品は、「ジャカルタ・ウェイステッド・アーティスト」という、若いジャカルタのコレクティブです。ジャカルタも今、都市開発が進んでいて、経済的にも急速に発展していますから、そうした中で自分たちが見慣れた街の風景がどんどん変わってってしまうということで、その見慣れた風景の中にある小さなお店を営んでいる人たちに、無料で新しい看板を書いてあげるよと、その代わりに古い看板を僕たちにくださいという交換条件で集めたものを、壁にこうして展示することによって、ある時期のジャカルタのあるストリートの風景をアーカイブして残していくことができるという試みなんです。

これを初めて見た時に、「何ていい作品なんだろう」と思って、早速展示会に出てもらって、そのあと森美術館の収蔵品になりました。そのときに各看板を提供してくれたおじさん、おばさんたちにインタビューをした映像もあって、展示としては美術館の中で行われていますけれども、実際の彼らのアクションとしては、社会の中に出て行って、社会をどう考えていくのか、そういう作品になっています。



一方で、算数とか理科という国境を越えた自然界の秩序や世界の法則というようなものを明らかにしている、しようとしている分野から、現代アートを見てみると、また面白いものが見えてくるなというふうに思っています。ワールド・クラスルームで出している例の一つとしては、杉本博司さんの「数理模型」。19世紀から20世紀にかけて、数学の難しい方程式を視覚的に立体化して見るというときに、今ではコンピューターで容易にできてしまう造形を、石こうで作っていたんですね。それを杉本博司がもともと美しさを求めて作った形ではなくて、数学の方程式が元になった形であるにもかかわらず、なんとも美しい造形なので、その観念がそのまま形になったものとして、写真のシリーズには「観念の形」というタイトルをつけて、モノクロームで撮影をしました。照明の感じやアングル・・・みんな杉本博司らしい作品になっていて、スケール感もわからなくなるような美しい写真のシリーズです。



こちらは方程式をもとに、杉本さんが彫刻作品に作った、非常に精巧にできているものなんですけれども、そうした作品を数学のセクションで見せたりしています。

実際には一つの科目だけにアートは限られていなくて、読み解いていくと、いろんなコンセプトあるいはいろんな分野に接続するものが複層的に織り交ぜられています。どんなものが編み込まれているのかというのを、私としてはちょっと解説しながら、そこで「なるほど」というポイントに出会うことがなんとも楽しいというふうに思っています。

コンセプトを重視したコンセプチュアルアートの時代から、先ほどから申し上げているように、この世界の混迷がそのまま投影された作品も今では珍しくありません。本当に社会的政治的メッセージの強いものも、多く見られるようになってきました。作品を読み取りきれないものもたくさんあって、ぱっと見てなんだかわからないので、「現代アートは難しい」と思ってしまう方も多いと思うんですけど、実際には、作品の脇に解説もあったりしますので、まず見た目から何が読み取れるのかなというのを見て、そのあとで解説をちょっと読んでみたり、それから今は動画などもアップされていますから、アーティストの名前を検索すると、アーティストが話している姿を見たりすることも容易にできるようになりました。見る人それぞれが、自分の感性や自分の人生経験に照らして、どう自分は反応するのかというのをそれぞれに楽しんでいただくと、多くの学びもありながら、自分自身のことも反すうしながら、とても充実した楽しみ方ができるのではないかなと思います。

<より良い世界をつくるために>

より良い世界をつくるために

## 世界の多様性を学ぶことは 不確実な世界を生きていく上で重要

今、こういう世界の中で、いかにこの世界が多様な価値観でできているのかということを実感していくことはとても重要なことだと思います。自分の考え方だけではないんだと思うことは、すごく自分を自由にしてくれることだとも思っています。その一方で、それでもなお、世界中のものすごく違う人たちが、どういうふうに共感したりつながったりできるのか。“普遍的なもの”というのは何か。その両方を学んでいくことは、この不確実な世界を生きていく上で、極めて重要なのではないかなというふうに思っています。

より良い世界をつくるために

これから何に注目をしていくのかということなんですけれども、やはり世界がこれだけ多様になってきた時に、日本という国がどんなことになっていくのかというのは気になります。美術においては、日本の近代化と

というのは明治維新以降ですね、西欧に追いつくために切磋琢磨して、戦後も現代アートの中心であるアメリカあるいは歴史のあるヨーロッパにどうやったら追いつけるのかと頑張ってきたんですけども、この30年は既に違うフェーズに入っているということも、もう少し皆さんにも伝えたいなと思っています。

つまり、自分たちの歴史がどうなのか、自分たちとアジアとの関係がどうなのか、そして世界との関係がどうなのかというふうに、より大きな世界観から、自分の立ち位置あるいは日本の立ち位置を考えていく必要があると思っています。実際、アジア太平洋地域の中でも、美術館やアートフェア、それからビエンナーレも増えていて、今、アジアの中心は香港とシンガポールにあるというふうに、現代アートの世界では言われています。その中で、日本、アジア、世界というこの同心円状に広がっていく世界観を持ちながら、「これからの時代に求められるどんな役割を、日本が引き続き果たしていけるのか」というようなことは、考えていきたいと思っています。



もう一つは、私も美術館で長く働いてきましたので、「美術館というものがどういうふうに社会の中で役割を果たしていけるのか」ということも大きな問題だと思っています。美術館活動ということ言えば、日本はアジアの中でも早く近代化が進んだので、第2次世界大戦前、現代アートという時代が来る前に、既に例えば大原美術館あるいは松方コレクションというような、その当時の美術を集めていたコレクションもありました。

戦後、日本が経済的に発展していった中で美術館もたくさんできて、「美術館ブーム」という時代もあったんですけども、多くの美術品が日本国内の美術館にたくさん収蔵されています。そうした資産をこれからどう活用していくのか、そして次の世代にどう継承していくのかということも、大きな課題になっていると思っています。

結局は、アートがどういうふうに人々あるいは社会に、もっと大きく言えばこの地球に、貢献できるのかということが私の大きな関心事で、アートを通して、自分が生まれた時よりも少しでも良い社会になって自分の人生を終えられるといいなと思っています。冒頭でも言いましたけれども、私たちのウェルビーイングにアー

トがどんな影響を及ぼすのかというようなことも考えていく時代になっているというふうに思っています。



美術館の定義も、「ICOM」(international council of museums)という大きな世界の組織がありますけれども、そこでも新しく去年、ミュージアムの定義というのが更新されまして、より社会的な価値あるいはサステナビリティに向けた働きも期待されるようになっていきます。

改めてこのキュレーターという仕事の語源が、世話をしていくとか、ケアをしていくというようなことであるというのを考えると、これからの世界を、アートを通していかに良くしていけるのかということ、引き続き考えていきたいと思っています。私たち一人一人の感性とか、皆さんの気持ちを、少しでも良い方向に向けていけるといいなと思っています。

## <Q&A パート①>

Q. アートを見に行く前に  
予備知識は必要？



KEI さん「よく美術展に行っていて、現代で言うと、例えば去年はリ・ウファンさん(韓国の美術家)やゲルハルト・リヒターさん(ドイツの画家)などの美術展に行きました。残念ながらよくわからなかったなという感想を持って帰ってきました。先ほどおっしゃっていた宮島達男さんも、千葉市美術館で特別展をされたことがありまして、行きました。今まで見た中で、正直一番分からなかったんです。リ・ウファンさんやゲルハルト・リヒターさんは『分からないな』くらいなんですけれど、宮島さんになると『何が何だか分からない』というくらい分からない。現代アートは、見に行く前のいろんな知識といいますか、仕込みがある程度必要なのかなと思いついて聞いていたんですけれども、例えば宮島さんであれば、どれぐらいの事前準備が必要なのか教えていただくとありがたいです」

片岡さん「私も、全く事前準備なく展覧会を見に行き、見ただけでは全く分からないということもよくあります。ただ、アーティストがそこにいたりするとつかまえて、『どういうことなの?』と聞いてしまったり、自分で解説を読んだりして納得したりはしています。宮島さんもコンセプトはもう30年ぐらい前から全然変わってなくて、永遠に続いていくように繰り返される、そして、全てのものをつながっているという仏教的な思想を3つのコンセプトにして作品を作っているの、恐らく事前に仕込む必要はなく・・・展覧会に行ったらちょっとした解説を読まれたりしましたか?」

Q. アートを見に行く前に  
予備知識は必要？

NHKACADEMIA



KEI さん「もちろん、ちゃんと読みました」

片岡さん「それで『なるほどと思うか』。でも解説を読んでも『そう言われても、ぴんと来ないな』という作品もあるので、それはあまりお気になさらず。おそらく仕込まずに、“素”の気持ちで見に行き、それでも心が動かされる展示に会うこともあると思います。知らないことを知るのが大好きなので、知らないところに行き、新たな学びがあることを楽しみにしているんですけども、KEI さんは KEI さんなりに、その現代アートとのつきあい方、楽しみ方を見つけていただくといいなと思います。ちなみに宮島達男さんも、1984 年にヨーゼフ・ボイス(1921 年～1986 年/ドイツの現代美術家)というすごく重要なアーティストが東京に来て、彼が芸大の学生だったときに討論会をしたそうなんです。『そのとき彼が言っていたこと、全く分かりませんでした』というふうに言っていました。ただ、『今になって、あのときボイスが言いたかったことがこういうことなんだなというのが実感できるようになった』というふうに言っていましたので、KEI さんも今いろいろ見ていただいて、もしかしたら 30 年後ぐらいに、『そうか、リ・ウファンはそうだったのか』というふうな瞬間が来るかもしれないので、そのときのためにも、今いろいろと見ることの貯金はされておくといいんじゃないかなと思います」



ハナイさん「私も現代アートの絵を描いているアーティストなんですけれども、美術館を見るのがとても好きで、いろいろなところへ行っています。森美術館の展示に、他の美術館にはない、独自の、全く違うものを感じるんですね。『他とちょっと違うところは何なのかな』と、ちょっと前から気になっています。そしてこれから先、美術館として未来に伝えることの根底にどういうことがあるのかなというのがすごく気になります」

片岡さん「これまでいろんな人が展覧会を作ってきて、私も館長として3代目なんですけど、少なくとも私が意識しているのは、森美術館は東京の六本木という場所にありますが、『そこに居ながら世界の大きな動向をきちんとそこに集約してつなげることができるのか』ということです。そのことを、自分では問いかけています。つまり、自分が好きで見せたいアーティストとか、今日本だけではやっている人ということではなくて、世界がどう動いていて、それを展覧会という方法、あるいは個展で一人を選ぶということで、どのように象徴して伝えることができるのか。そういう場でありたいと思っています。

それからもう一つは、幸いにも多くの方が訪れてくださる美術館なので、そういう意味では、もっと光を当てるべき、光が当たるべきだと思う人をそういう多くの人がある場所で見せる。そうすると、全く予想もしない存在感を放つということがあって、そこから次のステージに行くというようなことを見てきましたので、そういう役割も果たせるといいなとは思っています。

いろんな意味でたくさん美術館がありますから、森美術館でなければならない理由、今ここで作らなければならない理由を、自分に問いかけながら、キュレーターの中で話し合いながら、いま森美術館でやるべき展覧会とは何なのかなというのを、ずっと議論しています」



エドウッドさん「前々から質問したかったんですけど、現代アートが現代の社会を映すというお話で、僕が最近ちょっと考えているのが、AI・人工知能がこれからの芸術というものをどう変えていくのかということです。どういう影響があるのかということが聞きたくて質問しました」

片岡さん「AI、あらゆるテクノロジーの進化は人類の歴史上どんどん進んできていて、その度に、例えばビデオが生まれたらビデオアートが生まれるし、インターネットが出てきたら、インターネットを使ったアートが生まれるし、あらゆるテクノロジーとアートの発展はともにあるんですね。ただ面白いのは、昔からやられている『陶芸』や『紙に絵を描く』というようなこと、そういう昔からの技法もなくなるらないんですよ。ですから、昔からの技法の上に、より多くの表現方法が積み重なっている。それゆえにどんどん複雑になってはくるんですけども、AI についても、いずれそうした作品も出てくるだろうと思っていますし、ビデオアートもどんどん発展して、VRがあったり、ARがあったり、明らかに技術の発展とともに変わってきています。

私は、AIが登場したことによって、キュレーションがどう変わるのかということにも興味があって、つまり、最初に申し上げたように、本当に膨大な量の情報、あるいはどれくらいか数えられませんけれども、世界各地あらゆるところにアーティストが生きていて、歴史上もっとちゃんと評価されるべき人まで数えると、とてつもない量のアーティストを相手にしないとイケないんですけども、それはもう一人の人間が把握して理解して分析するのは不可能です。その基礎的なリサーチのところをAIが手伝ってくれるようになるのではないかと考えていて、“AI アシスタントキュレーター”というのが将来できるのではないかなと思っています。MIT Center for Art, Science & Technology のレジデンス・アーティストとも、そんな話をしています。

ただAIには、人間が知識を教え込んでいかないとイケないので、例えば私がこれまでに会ったアーティストの情報の全てを教え込んでいくのも、それはまたちょっと大変なので、いろんな人がインプットしながらということになるかもしれませんが、その発見はちょっと楽しみです」

エドウッドさん「僕は『表現すること』を仕事にしたいくて、チャット GPT だったり、そういうものによって、

これから自分のやりたいことがなくなってしまうのではないかとちょっと考えていたんですけど、今の話を聞いたら、プラスの面も多いのかなと思いました」

片岡さん「多分、できるようになることと、まだまだできないことと両方あると思うので、その新しいテクノロジーを使って何が可能になるのかというのを考えたらいいと思います。同時に、全てがそれにとって代わるというのは難しいし、いい話の裏には同じぐらい難しさもあるので、そうしたことも分析しながら新しい表現にぜひチャレンジしてみてください」

## <Q&A パート②>



ゆゆさん「アートが、人々やウェルビーイングに与える影響に関心があるというふうにお聞きしたんですけども、どういうふうにして与えた影響を測ることができるのか、もし思いつくことや考えていることなどがあれば教えていただきたいです」

片岡さん「アートとウェルビーイングの関係についてはいろんな研究が進んでいまして、例えば世界保健機関、WHO のヨーロッパ支部でも大変多くの研究結果をもとに分析した報告書も出ています。ただ、それを一人一人の個人に置き換えてみると、その研究結果の数字が出ているからといって、『そうか、アートはウェルビーイングにいいのか』というふうになかなか思えないところが難しいです。やはりいろんな作品に出会って、いろいろ情報も得ながら、学びの場になるという言い方をしましたけれども、一方では、そうした説明が全くなくても、作品を見て本当に心がキュンとくるといえるか、渴いた心に染みわたるような作品もあるし、それから美しさだけで圧倒されるようなものもあるし、そうした経験を積み重ねていくことによって、ウェルビーイングということと関係があるのだなということが、ご自身で実感できていくのではないかと思います」

ゆゆさん「いろんな作品を見て、どんなものを見たときに何を感じるのか、自分なりに理解してみたいなと思いました」

片岡さん「私も作品を選ぶ時には、解説を読んでよくできているなど思うだけではなくて、やはり実際作品を見て、本当に自分の心が動かないと、なかなかそれを皆さんと共有したいというふうに思えないので、“自分の心の動き”はすごく大事に観察しています」



めぐみさん「政治的なことなどを直に言葉で言ったりすると、引かれたり煙たがられたりすることが多いので、アートで何かできたかなというのを思っています。でもやっぱり現代アートなどを見ると、言葉がないと難しいというのもすごく思いました。心の健康というよりは、政治的なことや考え方というようなところで良くなったということを、展覧会などで実感したことはありますか」

片岡さん「やはり見る人の気づきの問題というはあるかなと思っていて、全く知らない地域の、全く知らないアーティストの作品に接して、この人がなぜこれを作ろうとしたのかというのを考えて、いろいろ見たり読んだりしているうちに、全く意識していなかった社会の構造のゆがみや、そんなところでそんな問題が起こっているのかということに気づかされたりというようなことで、見る人の意識が変わっていくということはあると思います。

もちろんアクティビズムと現代アートの表現はすごく近いところにもあって、より直接的にそうした政治的なアクションを作品化していくタイプの人もあります。アイ・ウェイウェイはどちらかというところ、そちらに近いタイプのアーティストだと思います。もう一方では、もっと詩的に、ものすごく見た目は美しくてポエティックなだけけれども、それを読み込んでいくと非常に重要なメッセージを私たちに送ろうとしているという人もいます。それから、いろいろ規制があるような国で表現をしている人は、メタファーとか暗喩、隠喩、そういう言葉を使いますが、何かに例えて表現する。それを受け取る側が、これは何の例えかなというのを読み取ってあげると、暗黙のメッセージがそこでつながるんですね。そういうことで相手に気づきを与

えられるかどうか、そんなことになるのかなと思います」

めぐみさん「知識がなくてもパッとわかるようにできたらいいなと思います」

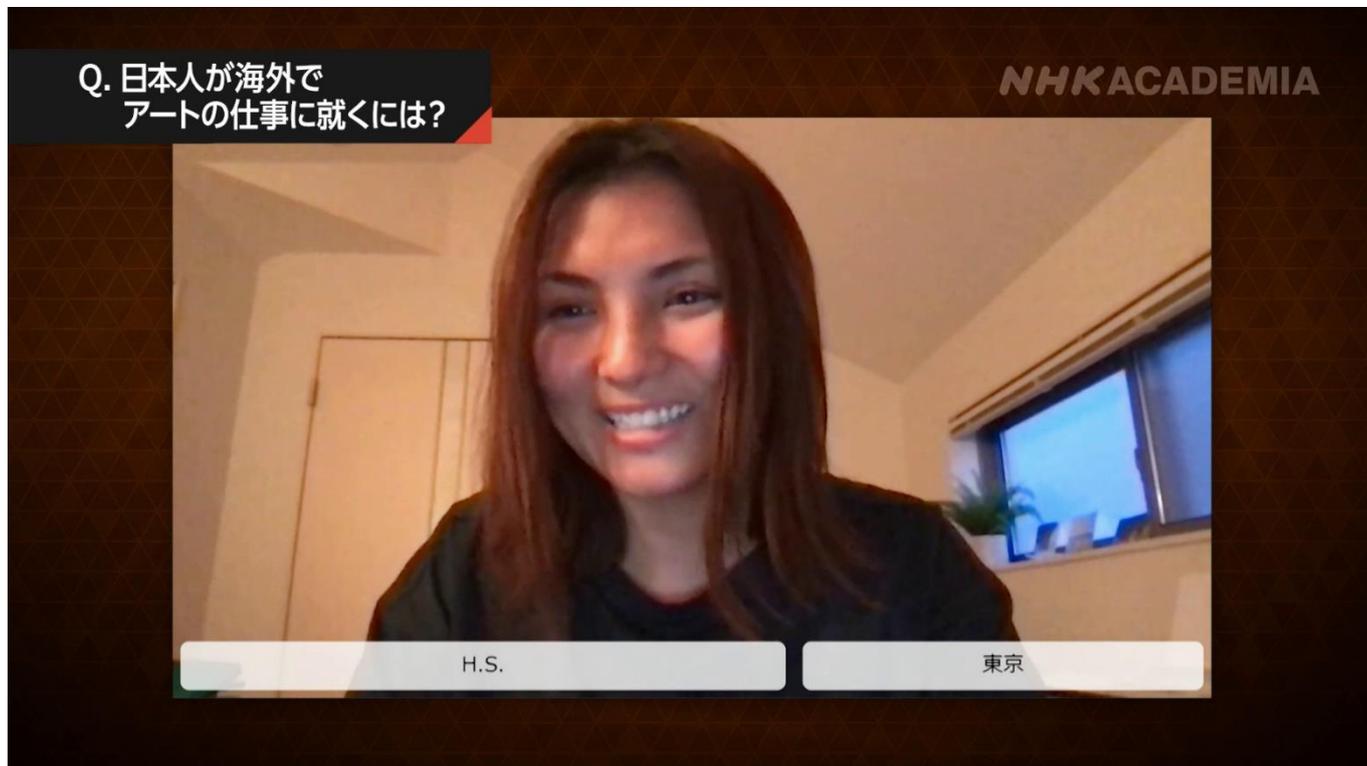
片岡さん「もちろんニュースも読めるし、新聞も読めば何が起きているのかというのも、直接的に言葉で伝わってくると思うんですけども、大きなマスのメディアではなくて、それぞれ個人が、この人がどう考えたのかなという、その個人の気持ちに出会えるというのは、作品を通してすごく心が動くところかなと思っています。そしてメタファーを読み解く、そのためには、こちら側の“想像力”も必要なんですけれど、想像力は、私は訓練できるものだと思っています。相手がどう思っているのか、全然知らない人が何を考えて作ったのかということを生懸命想像するようなことを繰り返していると、読み解けるようになっていたりすることもある、それは楽しいことでもありますね」



まちださん「今、学芸員の取得を目指して勉強を頑張っている最中です。作家さんと向き合いながら、新しいアートを創造していく、展示をしていくということをおっしゃっていましたが、その際に、アーティストの中にはすごく難しい方もいらっしゃるかなと思っていて、そこに向き合う際に大切にしていることがあれば、お伺いできればなと思います」

片岡さん「アーティストとの関係もだんだん変わっていくようなところもあって、若い時はアーティストが思うこと、言われることをいかにたくさん実現してあげられるかが大事だと思っていたので、本当にいろいろ考えて実現する。もちろんこちらも予算があったり、空間の制限があったりするので、いろんなことを考えながらやっていました。だんだん経験を積んでいくようになると、アーティストとも話し合えるようになって、いろんなアイデアが展覧会づくりの中で出てくるんですけども、もしかしたらこの方が良くないとか、これは余計なんじゃないとか、見せ方としてはこんな順番の方がいいのではないかなというようなことを一緒に話し合えるようになって、それはまた新しい楽しみであり、気づきにもなっています。

アーティストとの関係も、「出汁(だし)キュレーター”を目指すものとしては、相手によって出汁(だし)具合をちょっと変えているので、自分がどう作用することがこの人の作品を見せるのに最も良い結果につながるのかなということ、ちょっと押したり引いたりしながらやっています。ただ、その人の作品を本当に心から尊敬できて、その人の考え方にも共感できて、それで一緒に展覧会を作るということが、非常に重要なと思っています」



**H.S.さん**「私は、ふだんはアートの世界ではなくて、音楽の世界で仕事をしているんですが、今まで海外に長年住んでいたことがあって、ボストンのイザベラ・スチュワート・ガードナー美術館などでボランティアガイドをしたり、そういった形で素人ながらもアートにずっと関わってきています。日本出身でアートに興味のある方が、日本ではないところで、キュレーターではないんですけど、そういった仕事、キャリアに興味があるという場合に、アドバイスがあればお聞きしたいなと思ひまして」

**片岡さん**「日本語が話せるということが何らかのベネフィットになる場所を考えると、例えば海外で日本人の人が展覧会をする時に、そのコーディネーションをしてあげるとか・・・それは語学の通訳もできるし、それから現地の事情もわかっているならば、日本からアーティストが来たときに、そのコーディネートをする。それはあるかもしれませんね。」

愛知の国際芸術祭では、最終的には愛知で展覧会をやったんですけども、ラテンアメリカのアーティストがたくさん参加していて、スペイン語しか話せない人がいたので、スペインにいる人がコーディネーターになって、オンラインで全部つないで仕事をして、最終的に愛知で会うとか。それからアフリカ系のアーティストで、やっぱりフランス語のほうが得意な人がいて、その人のことは、パリに住んでいる日本人のコーディネーターがフランス語でコーディネートして、最後に愛知に来るというのをやっていました。国境を越えてあるいは言語を超えて必要になる仕事というのは結構あるのではないかと思います。

ただ、芸術祭の仕事が難しいのは、瞬間的にすごく忙しくなって、あとはまた全然仕事なくなる。恒常的に

同じ量の業務があるわけではないので、生活を維持していくという意味ではちょっと難しいかもしれません。ただ、そうしたことで経験を積んでいくことによって、また全然別の仕事もあるかもしれませんし、それからあとはカタログを作るとか、編集の仕事は語学が両方きちんとできると、大変貢献度は高いのではないかなと思います」



**もも君さん**「美術館にはよく行くんですけども、ここ 10 年 15 年くらいですか、美術館を出たところのアートフェスティバルのようなものが、日本全国で小ささまざま開催され始めているんですけども、見るのも好きですが、裏方も好きです。その裏側を見るととてつもなく大変で、大変な苦勞があると思うんですけども、ある程度成功と失敗がわかるような部分に分かればと思っています。例えば、宣伝の部分だとか……。ちゃんとしたポイントというか、目に見えるような形であればと思うのですがどうでしょうか」

**片岡さん**「美術館の展覧会もそうですし、国際芸術祭のようなものもそうなんですけれども、まずは何が失敗で何が成功かというのを測る、定量化していくのが非常に難しいものだと思うんですね。もちろん『入場者数』というのは一つの指標にはなりますけれども、果たして個々人の“心の気づき”にどう作用したのかというのは、計り知れないところもあって、それも先ほどのように 30 年後ぐらいに気づきがやってくるかもしれないので、もうちょっと長期戦の投資であるというようなところもあると思うんです。

ただ、私も 2022 年、愛知で国際芸術祭をやらせていただいて、美術館ではなくて、焼き物の町とか絞り染めの町とか、いろいろな町の『伝統』と『現代アート』がどう対話するのかなというところをやってみることによって、もともとそこにあるものを地元の人たちも含めて再発見するというようなことが起こって、それがまた外の人から評価してもらえることによって、わが町にはこんないいものがあつたのかと、地元の人たちが改めて気がつき、その芸術文化についてさらに力を入れていきたいという機運が高まるというようなこともあって、何がどんなふうに作用して前向きな形になっていくのかというのは、やってみないと見えないところもあるんですよね。ですから、そういう好事例を集めていくということも重要かもしれません。ただ、地域の芸術祭は、担当の方がどんどん変わっていってしまうので、2 年に一度あるいは 3 年に一度のお祭りのノウハ

ウを、どのように蓄積していくのかということも課題にはなっているんですね。

でも展覧会づくりは、キュレーターがいればいいだけではなくて、本当に多様な制作を担当する人がいますし、美術館のスペースでない場合には、愛知の場合は非常に優秀な『アーキテクト』という人たちがいて、いつも作品を展示しないような場所で作品が展示できるように、床、壁、天井を整えてくれるというすばらしいチームがいて、そういう人の力も必要です。それから、サインをどう出していくのかということでは、グラフィックデザイナーが活躍します。本当にチーム戦なので、そういう展覧会を作るあるいは芸術祭を作っていくためのそれぞれの専門家がもう少し育っていくといいのではないかなと思っています。それは美術館でも学芸員と総務の人というセットで、日本の美術館は長くきましたけれども、広報も教育もそれから展示も設計も、あらゆるところをもう少し専門化して行って、そういう人たちも別の専門家も育てていく必要があるので、アート界では課題は山積みなんですけれども、もも君さんがおっしゃるように、まだ各地域で試みている段階かなという気もします。それぞれの地域のそれぞれの芸術祭でいろいろ試行錯誤を続けながら、その地域ならではの芸術祭のあり方というのを探していただくといいのかなと思います。

それから、やめていく勇気も必要で、始めたら続けなければいけないということではなくて、わが都市ではとても手に負えないということであれば、一旦休憩してみる。あるいは近隣の都市と一緒にやってみる。いろんなモデルが考えられると思いますので、ぜひそのどこかの裏方に参加していただいて…。途中のいろんな規制に対して申請をしていくこととか、本当に大変なんですけれど、それゆえにできるものがどのくらい意味があるのかというのは、やっぱり作る側には問われていて、いろんな人の苦労を経て一つの形になっていくので、それが多くの人たちに感動を与えていくものでなければならないという作る側の責任もそこには関係してくるのではないかなと思います」



今日は皆さん、長い時間おつきあいいただきましてありがとうございました。私は「現代アート」というものに出会って、さまざまなアーティストとの出会いを通して、今自分たちが住んでいる世界が、どんなに多様で、しかもどれほどその多様さが美しいものであるのかということを感じてきました。世界は本当に輝いて見え

る。もちろん難しい問題もあって、それも含んでこういう地球に今自分が住んでいるんだな、生きているんだなということを実感することができるので、皆さんも、世界のどこに行っても美術館があって、いろんなところでいろんな人が表現していますので、そうしたものを見ながら、そして、自分とどう世界がかかわれるのかというようなことも、ご自身の想像力を訓練しながら、同じ人生ですから、豊かに時間を過ごしていただいて、楽しく過ごしていただければいいのではないかなと思います。どうもありがとうございました。